
高級男娼 香具耶の上客

四輪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

高級男娼 香具耶の上客

【Nコード】

N4011W

【作者名】

四輪

【あらすじ】

*BL作品ではありませんあしからず。ジャンルはサイバーパンクです。

現代まで鎖国を続けた江戸。

日本は江戸の風情を残しつつも、歴代の平賀源内による発明で、コンピュータネットワークを張り巡らせるまでに技術が進歩していた。

舞台は遊郭街吉原。

「陰間」と呼ばれる男娼である香具耶には、息を呑むほどの美貌の他に、もうひとつの顔があった……。

世は徳川様の治世を三十代数えまして、世も末、世も末とは遠く鎌倉の昔から言われていることでは御座いますけれども、いよいよ乱れてくる世の中に世間の人は皆口を揃えて世も末と言うことで御座います。

さてもその後、^{のち}「とかく茶なことではなければ世の中面白くないよ」と去る人も言われたことでありまして、巷ではこんな端唄^{はうた}がよく流行ったもので御座います。

柳、やなぎで世も面白う

梅にしたがひ桜になびく

其の日、そのひの風次第

虚言^{うそ}も実^{まこと}も義理もなし

「古い唄流すなあ、このラジオ」

小間使いの少年はつぶやき、ラジオの電源を落とす。今しがた二階へ登っていった女客の線香が、そのまえで淡くくゆっていた。

この世ならぬほど美しいものを見たらどうなるか。
^{かくや}香俱耶を前にした人間は、たいていが皆同じ表情になる。

ここは江戸が浅草、夜の花街吉原町。華々しい遊郭が立ち並ぶ、その少し脇へ引っ込んだところの娼館、遊馬茶屋である。

茶屋と言ってもお茶お菓子を出すところではない。その昔は茶屋に飯盛女と呼ばれる下女がいて、そのうちそれらが春をひさぐようになり、いくつかの茶屋は遊郭へと変化していった。その名残で今

も看板へ茶屋の名を出すところが多い。

遊馬茶屋はそれほど派手な外装を施さない。場所も通りに面しておらず、客引きもない。それと言うのも、目当ての客しか訪れないからだ。ここは陰間専門の娼館なのである。

陰間とはいわゆる男娼、遊女の男版である。

精通前の少年から二十歳過ぎまでを集め、鍛錬を施した後、主に男客へ売るのがだ。だいたい十五くらいまでを『蕾花』、十八くらいまでを『盛花』、そこから二十台前半くらいを『散花』と呼び、その寿命は娼婦よりも短い。

歳が行くと今度は女性の客が多くなってくる。それは女性相手の方が色々と気難しい問題が多いため、それらをこなせるなら若くして女客を取ることもある。

『盛花』の香俱耶もそんなひとりである。

陰間の値段は高い。一晚泊まりで一両、線香一本一切りの時間で銀二十匁。自然とその客は上流階級が主になる。特に香俱耶は遊馬茶屋の最上級な陰間。扱いは太夫なみの香俱耶の客になるには、それこそ山と金を積まなければならない。

ただし――。

遊馬茶屋は異色である。十分の一の金も払わずに、香俱耶の客となる方法があるのだ。それを知る者は少なく、また紹介コネも要り、なおかつ客自身にある“資格”が必要だが、事実、とある町医者コネの紹介と暖簾をくぐったこの女は、規定の料金よりもずいぶん安い値段で線香一本を買い、遊馬茶屋の二階、香俱耶の部屋へと通されていた。

そして現在、ぽかんとしたまま畳に座り、自失している。

「症状をお聞きしましょうか――」

脇息に肘をついた香俱耶は、艶やかに微笑みながら問いかける。この笑みが余計にいけない。女は質問に答えるどころではなく、ため息ばかりをついている。

長く伸ばし結い上げた髪。滑り落ちるようなこめかみの線。大きく

きらきらと光る瞳は歳よりも幼く見せ、それでいてしっかりと結ばれた唇は大人を感じさせる。唇にはすつと紅を引いている。それ以外に化粧らしい化粧はせず、着ている物も落ち着いた藍色の浴衣に着物の帯を巻くという、最近流行の涼しげないでたちだ。

それでも女と見まごうばかり、いやそこから気取っている花魁の類などが芋にしか見えぬほどの美しさだ。まなざしが当てられたその場所に春が訪れるような、香俱耶の美貌であつた。

「……あ、そ、そうです」

間と言つには長すぎる間をおいて、女は我に返る。上等な着物を着ていた。どこか裕福なところの女中でもしているのだらう、最近の使用人にも贅沢をさせる店が多いと聞く。つい癖で香俱耶は客の値踏みをし、今日は違つのだつたと意識を改めた。

香俱耶よりもだいたい年上の女は、ひどく緊張しながらつかえつつ言葉を続けた。

「わたし、あるお屋敷の女中をしておりまして。いえ、元はこの吉原の遊女でございましたが、お館様に引き抜かれて、まあ困われたようなものなんです——」

身の上話から切り出す女に、香俱耶は興味深げにうなずく。この辺も癖だ。

「お館様はその、女性なんでございますが、なんと申しますか男よりも女色を好みなさるお方でして。わたしもよく、夜伽のお相手をいたしますが、どうにも妙なことが最近……」

「つまり、うつされたとお考えですね」

一向に核心へ入らない女の話を、一気にそこへ持つていく。女は目をパチパチさせながら、ひとつつなずいた。

「——そうです」

「お見せ願えますか？」

女は躊躇なく片方の着物の合わせ目はずし、裸の肩を晒した。白い肌にはあざやかに、花の刺青を施してある。肩から背中へと、まるで生け花をそこへ写し取ったようだ。

見たことのない花だ。蘭のようでもあるし、朝顔のようでもある。茎から葉にかけては肉厚の葉肉植物のようにも思われた。花は黄、赤、橙、紫と、色も豊富である。生き生きと女の肌に咲き誇っている。

「わたし、刺青など入れた覚えはございません」

女は不思議なことを言う。

「いつの間にかわたしの肌にも、この花が咲き始めたのです。見てみると、喰われてしまいそうなほど綺麗なこの花が――」

「なるほどなるほど」

香俱耶はがぜん興味を覚え、身を乗り出した。このような症例は初めて見る。手元の機械を取り、その端末を耳にはめ込んだ。耳栓のようなものから細い線が延び、先端にはなにやら餅のような質感の白い突起が付いている。女はいぶかしむ。

「それは……」

「当代平賀源内様の作です。怪しいもんじゃありません」

「げ、源内様の？」

「ちよいと失礼しますよ。痛くはありません」

香俱耶は立ち上がって女の背に回ると、花の刺青の上へ白い突起をずぶりと差し込んだ。半寸ほど異物が刺さったというのに、女はなにも気づかず目をしばたいているだけだ。

「ふむ……」

つながった突起から線を通し、耳の端末へ音と情報が届く。聞いたことのない音。やはり初見の存在だった。

これはきちんと情報を取らねばなるまい。突起を引き抜き、香俱耶は備え付けの棚へ向かう。

「ご説明しましょう」

先ほどの端末を仕舞って棚の中から別の小さな機械を取り出し、香俱耶は再び女の前に腰を降ろす。

「まずその刺青、正体は妖物あやかしものと言う存在です。簡単に言うると一種の病気ですが、その元となるものが普通の風邪なんかとはまるで違う」

「はあ……」

香俱耶は部屋の片隅にしつらえてある、中型の液晶画面と木箱を指す。

「そのあれ、パーソナルコンピュータですがね。いまや長屋にも一台と言う時代です、ご存知でしょうが——」

「はあ、わたしも触るくらいは」

「あの中身と同じもの、それが妖物です。二代前の平賀源内が開発した『エレキテル・ネットワーク』、それは奇しくも情報化社会をもたらしたのみならず、古来より不思議とされてきたもの共をも光の下へひきずりだしたのです」

返事もせずに理解しようと務める女に、香俱耶はここから肝要と指を立てる。

「パソコンの中では、どのようなものが動いていると思います？」

「はて……考えたことも」

「僕も原理は理解しませんが、そこでは『言霊』が多様な処理をするそうです。本来言葉として音として用いられたものを、より純粋に高度に機械の中へ閉じ込める——すると言葉では薄い効果しかなかった言霊に、強力な呪力を持たせることが出来るのだそうです」

「それが、^{プログラム}言霊式つてものですか？」

「そうその通り。そして最近の研究では、人体の根幹も同じ言霊であることがわかってきています。人がこう、おなかの中で赤ん坊になつていく、その設計図のようなものから始まってね。どう言う病気にかかりやすいとか、果ては性格なんかも言霊式によって定まっているらしい——」

ぞつとしたように女は肩をすくめた。香俱耶は手の中の機械をくるくる回しつつ、続ける。

「その人間の言霊へ寄生する存在、それが妖物です。連中は言霊で出来ている。プログラムの塊なのです。しかし人へ寄生する——まあ我々は古い言い方に従って、『取り憑かれる』と表現しますが——そうなると人の言霊を狂わし、利用してさまざまな症状を引き起

こすことになります。あなたのその花も一例」

「そんな……」

恐怖に凍りついた女の顔へ、香俱耶はまた艶やかな笑みを向けた。光に照らされたように、それだけで女の表情はやわらぐ。手元の機械をよく見えるように差し出した。

「ご心配なく。それを治すために我々のような人間が居るのです。
プログラマー

言霊士がね。ようやく妖物も、言霊士も世間に認知され始めた。僕たちは積極的に治療を進めて、その認知を広げたいのですよ——」

だから治療費も格安なのです、と結ぶ。

至高な香俱耶の目標に、女の目は感動で見開かれている。純粋な性質らしい。よくよく見れば女色の女性が認めただけあって、女の顔も肢体もかわいらしかった。香俱耶はずっとその隣へ身を寄せ
る。

「少し、試料をいただきますよ」

「はい——」

小さな機械の先端、そこも白い餅のような物体で出来ている。それを女の胸元へ差し込むと、驚いた女は小さく声をあげた。

「あつ……」

「これは言霊を吸い出す機械です。接続部分は妖物の一種から摂ったもので出来ています。害はありません——」

香俱耶の吐息が女の首筋をくすぐる。女は身を震わせる。しばらく待ってからその機械を引き抜き、目の前で振って見せた。

「ほら、入った」

「あ、あの——」

「お館様にお伝えください。あなたのそれは治る、と。その気があるなら遊馬茶屋の香俱耶をお呼びつけくださいと。本日の治療はここまで。元を断たねば治しても同じなのです——」

「は、はい」

密着されてくらくらと眩暈のする風な女は、かろうじて返事をする。香俱耶は、つい、と女のもう片方の肩口から着物をはずした。

「それではお買いになった線香が尽きるまで、お楽しみくださいませ……」

冬の氷を思わせる織手が、刺青の花をなぞった。

「で、結局抱いたのかい」

翌日の遊馬茶屋。香俱耶の部屋には茶色く染めた髪を無造作に束ねた女性が、不機嫌そうに胡坐をかいていた。歳は香俱耶とそう変わらない。ぶっきらぼうな物言いと吊り気味の眼がきつい印象だが、はつとするほど美しい女性である。

「そんなことはまあ、よろしいじゃありませんか、源内様」

女性の名は十六代目平賀源内。泣く子も黙る天才発明家を襲名したもののだけに与えられる名だ。香俱耶の常連客である。

他の客の話をすると、不機嫌になるのは常のことだ。失敗だった。取り繕う香俱耶に、ふん、と鼻息を浴びせ、源内は不機嫌なまま部屋の隅にあるパソコンを指す。

「分析する。連れてつてくれ」

「はいはい」

香俱耶は腰に手を入れ、その身体を持ち上げた。足が不自由なのだ。そのせいで体重もひどく軽い。一見正常に見える足だが、生まれてつき動かないのか、それとも事故病気のせいなのか、長い付き合いでも香俱耶は知らなかった。それどころか源内の本名も知らない。あまり自分のことは話さないのだ。

それでも行為の後なんかには、ぽつりと話すこともある。十四のときに襲名したこと、妖物に強い思い入れがあること。そのための道具をさまざまに開発していること――。

自分について話すときの源内はいつになく恥らっていて、その姿

を見るのが香俱耶の楽しみでもあった。いつも強気で、時に傲慢なこの女性のそんな表情を見るのは自分くらいだろうと思う。

パソコンの前まで源内を運ぶと、日本一の天才は刺青の花の情報の入った機械を接続する。読み込みを待つ間に香俱耶は話しかける。

「源内様、料金は後で払い戻させますよ」

「いいと言ってるだろ。いつもしつこいな」

陰間として香俱耶の時間を買うときと同じように、言霊士としての用向きで呼ばれても、源内は等しく線香を三本買っていく。それは頑として譲らない。ならばこちらがお宅へ伺いますと言うと、人が入るのは好かんから出向くと答える。

あくまで客。源内なりのけじめなのだろう。ただ単に、香俱耶の線香など源内にとって塵に等しい金額なだけのことかもしれないが。「ふむ、出た」

液晶画面には香俱耶が見ても意味不明な文字列が流れ始める。ずらずらと流れていくそれを鋭い視線で源内は追っていく。光の映りこんだ瞳を香俱耶は見つめ、集中状態に入ったのを見届けるとそつとその場を離れた。こうなるとしばらく、源内は身じろぎひとつしない。

一通り眺め終わるや、今度は凄まじい勢いでキーボードをたたき始める。香俱耶もある程度の言霊式を組めるものの、まったく未知の妖物に対して一瞬で中身を判断し、その対抗言霊式アンチ・プログラムをすぐさま組み立てるなど出来る芸ではない。もっとも江戸中探しても、そんなことが出来るのは、目の前の不機嫌な天才を措いてないだろうが。

「……これを処方してやれ」

そのうちに作業を終えた源内が差し込んだ機械を抜き取り、香俱耶へ投げて寄越した。ふいをつかれた香俱耶はつかみ損ねながらもなんとか受け取る。源内は大儀そうにひとつ伸びをすると、まなざしを向けた。

「ただしお館様とやらにな。感染源を断たねばならんぞ」

「わかってます。しかし、連絡はあるでしょうかね——」

「あるさ。あたしにはだいたい、誰なのか目星はついてる」

「へえ、誰なんです？」

「ここからちよつと離れた田舎の名主だ。広い土地を束ねてる。美人で若い。しかも金持ちときてる」

三白眼でにらみつける源内。常人とは違った論理で行動するこの天才のことを、香俱耶はいまいち把握しきれない。不機嫌の原因が嫉妬であるくらいはわかるのだが、余所の客がそれほど目障りなら香俱耶を困えればいいのだ。それくらいの地位と金を源内は充分持ち合わせている。

香俱耶は嘆息気味に応えた。

「それなら源内様も当てはまっておりますよ」

「どうだか。——いいか、香俱耶。行くならあくまで治療しに行け。求められても抱いては駄目だ。そのときはどうなっても知らんぞ」

「女色の徒だそうじゃないですか。だいじょうぶですよ」

「ふん、わからんさ」

また鼻を鳴らす。その日の源内は最後まで不機嫌だった。

それから数日もおかぬうちに、源内の予想通り先方から呼び出しがあった。これも源内の予想通り、江戸から二山ほど離れた一帯を支配する、土地の名主からである。

若いと聞いていても、それは名主を務めるにしては若いと言う意味だろうと思っていた。まさか本当に、香俱耶より少し年上、困っているあの女よりも歳若い女性が依頼主とは。

名主を目前にして、香俱耶は驚きを隠せなかった。

「綺麗なお方」

名主は遠慮会釈なしに香俱耶の頬へ手を当てる。ひやりとした冷

たい手の平。丸く整えられた爪が耳の後ろを搔く。

美しい女性だ。肩口で切りそろえた髪は椿の油でしっとり整えられ、かぐわしい香りが鼻をくすぐる。書の達人が会心の一線を引いたような唇と鼻筋と、なにより常に遠くを見るような不思議な瞳が印象的だ。心の中まで覗かれる気がする。

源内を除いて、美しさも地位も最上級の上客だ。うまく取り入ればいい客になる。しかし同時に、ある種の危険も感じていた。まったく相手の思考が読めないのだ。香俱耶の美貌の前で骨抜きに己をさらけ出して行く女性たちを見続けていたから、相手の心が読めないことはいつもと勝手が違うことだった。さすがこの若さで名主を勤め上げる女傑と言ったところだろう。

そこまでいつもの癖で計算し、今日は違っていたと苦笑する。どうも、この屋敷の人間を相手にするときは、身構えてしまつらしい。

「当主の薫子と申します。遠路ご苦労でした」

名主の声は耳の穴から腹の下へ、すんと落ちていくようだ。引つかかるところが何もない。

薫子の手はさらに大胆に首から肩へ伸び、身体を密着させてくる。

香俱耶は苦笑を隠さず、応える。

「僕の診断をよく信じてくださいました。本日はその用向きで」

「あら。よろしいことじゃありませんの」

「女性を好まれると聞き及んでおりますが――」

「わたくしは綺麗なものが好きなだけ。このように美しい殿方がおられるとは、望外の喜びですの」

まずいな。源内の三白眼が脳裏に蘇る。

ここで上客をひとり手に入れるか、源内の不興を買うか。むずかしい選択だ。

とりあえず首筋を這う手から距離を取ろうと、香俱耶は持参した道具を畳へ広げ始める。珍しい機械に、薫子の興味もそちらへ移ったようだった。

「当代平賀源内の手になる品々でございます。まずはこれらにて検査のほどを」

対抗言靈式の用意はある。必要のない検査だったが、こう言う手順を踏まないと信用は得られない。

ふと、部屋の間隙に生けてある花が眼に留まった。

風流な花瓶に生けられたその花、それは刺青で見たものとまったく同じ、鮮やかな赤い花だったのだ。香俱耶は道具の説明する言葉を切り、花を指した。

「……あの花、肌に広がる刺青と同じものですか？」

「ええ、そうです」

「いったいどこで摘まれたのでしょうか。僕は見たことがない——」

「ご覧になりますか？ 花園を」

嫌な予感が、直感として背筋を駆け上った。

いずれあとで、と言おうとする前に、薫子は香俱耶の目前で着物の帯をはずし、合わせ目をかき開く。香俱耶は目を剥いた。

「これは……！」

薫子の身体には、刺青がなかった。代わりに色鮮やかな原色の花々が、肌からによつきりと生えているのである。

むせ返るような濃密な匂いが部屋に立ち込め始める。香俱耶は思わず鼻を覆い、後ずさった。薫子は艶然と微笑む。

「美しいでしょう。わたくしの花は——」

香俱耶は本能的な危機を感じた。腹から胸から、花園を作った女は軽やかに声を上げて笑い、それを見つめる香俱耶の身体は、明らかに自由が利かなくなってくる。

気がついたときには遅かった。畳へ手を突き、呻く。

「香りには、毒が……」

そのまま横倒しに転がり、仰向けに寝転がってしまう。手足にまるで感覚がない。上から覗き込んだ薫子が、気味が悪いほど鮮やかな一本の花を手取る。

「あなたにもほら、美しい花をおひとつ」

ずるつと伸びた花が香俱耶の身体を嗅ぎ回る様に蠢いた――。

その光景が最後。

視界が暗転し、意識が途切れ、香俱耶の肉体へ、いやもつと深く、人が認知することの出来ない領域の内部へと花を構成するものが入り込む。

それは人の言霊。人間の根幹の情報。

香俱耶の身体を乗っ取るうとするかのように、妖物の汚染が始まり、しかしそれは突然、弾かれたように停止した。

香俱耶の身体の中へあらかじめ仕込まれていた言霊式が発動したのだ。その言霊式は逆に、妖物が流れ込んだ道筋を辿ってさかのぼり、香俱耶の意識を敵の内部で開放する。

目を開けた香俱耶は真っ白い空間に居た。

「^{ジャック・イン}没入した。『取り憑いた』つもりだろうが、そうはいかないさ」

しかし危ない状況は変わらない。視覚は擬似的に、香俱耶の身体を空間内へ表現していた。いまや香俱耶は言霊そのもの。これが、源内にも不可能な香俱耶の能力だった。

いわゆる現場型の言霊士。それは言霊の世界へ意識を没入することの出来る、特殊な力を持つ人々のことだ。エレキテル・ネットワークのみならず妖物の体内の中へ意識をもぐらせ、それを殲滅する。今、香俱耶の意識は薫子に取り憑いた妖物の中へと、複製を植えつけようとするその性質を逆手に取って侵入したのだ。

「時間がないぞ――」

意識を失っている間に、身体へどんないたずらをされているかわからない。香俱耶は真っ白い空間を泳ぐように進む。

やがて空間はだんだんと淡く色付きはじめた。香俱耶は移動を止め、つぶやく。

「ここか。わかりにくいな。ヴい、ヴィジュアル・シフト……ああ、もう。なんで歴々の源内殿は横文字を使うのか――」

言いにくい発音に四苦八苦しなから、香俱耶は周りの光景を視覚変換する。淡いだけの色合いは、鮮明に立体感を持ち始めた。

「うげ」

人前では絶対に出さない声を上げて、香俱耶は絶句する。

目の前いっぱいにあの花が所狭しと広がっていた。まるで花の森だ。

「これは、無理だね」

簡単に諦める。一本か二本、花が咲いているだけなら引っこ抜いて終わりだが、これ进行处理するのは何年かかるかわからない。

しかし、進むも茨、戻るも茨の道のりだ。意識を肉体へ戻したとて、毒が回った身体は動きもしない。そもそも、妖物が物理的な毒を持つなど、非常にまれなのだ。それだけに人体への影響が懸念される。薫子の口調から、殺されることはないと思うのだが。

「……やはり、源内様の対抗言霊式しかないか」

持ってきた機械のなかに埋もれている記録媒体。あれを薫子の身体へ打ち込めば、おそらく解決するだろう。

だがしかし、どうやって。

「^{フリップ}転しかないだろうな。かなりの賭けになる——」

香俱耶は咲き誇る花畑へ足を踏み入れる。匂いはない。花を踏みしめるたびに香俱耶の言霊へアクセスが繰り返されているのがわかる。源内が組み、あらかじめ体内に仕込んである防壁言霊式がそのアクセスを全て遮断する。

「アクセス・ポイント発見……おや？」

花畑の先に目的のものをを見つけ、香俱耶は近寄ったが、同時に首をひねる。

花に囲まれて座り込んでいるのはひとりの少女だった。

妖物と人間は必ずつながっている。妖物の体内——これは正確な言い回しではないが、そこへ没入してもそのどこかには、寄生主である人間へとつながる場所があるのだ。

それはその人自身の形を取って、香俱耶へ視覚変換されることが常だった。

薫子には違いない。

しかし花畑の真ん中にいるのは、幼少の頃の薫子だった。

これが意味するのはどうということなのか――。香俱耶はさらに近づき、その隣へかがみこむ。

「薫子さん？」

「近寄るな」

細い声で拒絶される。幼い薫子の視線は一点を見つめ、香俱耶へは目もくれない。

心を閉ざしている。

転、すなわち妖物を通してその媒体たる人間への没入。そのためにはこのアクセス・ポイントを介さなくてはならない。このような状態では通り抜けることは不可能。通路は開いていない。^{ポット}

香俱耶はとにかく、説得を続けるしかない。

「どうしたのかな？ こんな花畑の中で」

「この子たちがわたしを守ってくれるんだ」

「守る――」

思わず花々を見回す。風を設定していないのに、ざあっと花畑は揺れた。少女は視線の位置を変えぬまま続ける。

「あなたも毒を盛りに来たんでしょ？ 叔父上と同じように」

「毒……。そうか。そう言う事が。ちよつと失礼しますよ」

少女の頭に手を置く。無反応な薫子。香俱耶はそこから、過去の情報を読み取る。

薫子の父が死に、権力争いが親戚内で起きたこと。

当主となる幼い薫子に毒が盛られたこと。

薫子を殺すはずの毒は花に姿を変え、叔父達を死に至らしめたこと。

その経験が薫子を極度の男嫌いにさせたこと――。

「ん、男嫌い？」

現在の薫子の振る舞いと、少し違和感がある。読み取った情報では、薫子は男に近寄られるのも嫌なほど憎んでいるのだ。

「なんだか悪い予感がするぞ――」

「もういいでしょ」

「はい、ありがとう。おかげで色々分かった」

「分かる訳ない。男はみんなわたしを殺そうとするんだ」

「そんなことはないはずですがねえ。少なくとも僕は、薫子さんを殺そうとしてない」

「それはあなたが女みたいだからだ」

「……素敵な理論ですね、それ」

「わたしはずっとここにいます。花に囲まれていれば怖くない」

「それが毒の花だってわかってるのに？ 薫子さん、あなたを包んでいる花、それは元々、憎むべき叔父上から仕込まれた毒なのですよ——」

びくつと薫子の肩が震えた。

よし、ここが押しどころだ。香俱耶は噛んで含めるように言う。

「わかっていたんでしょう。あなたが信賴して安心を覚えるその花。

薫子さんは誰よりも、男性の愛に飢えていたんですね」

「そんなことない！」

幼い声が叫ぶ。視線がはずれ、身体が震える。

——^{ポット}通路が開いた。香俱耶はすばやくその隙間へ手を差し入れる。
「すいません、時間がないんです！」

幼少の薫子の身体に差し込んだ手から、通路の内部へ没入。妖物から人間へと、香俱耶の意識は飛ぶように移動していく。

「視界に侵入！」

香俱耶の目に現実の光景が映る。現在の薫子が見る光景。香俱耶は薫子自身へ没入し、視野の共有を果たしていた。

裸の香俱耶が寝かされている。薫子は視線を手元に落とした。右手には巨大な、銀色に光る鍬——。なにかしゃべりかけているようだが、聞こえない。香俱耶は意識を広げる。

「聴覚に侵入——」

「——……の要らないものは除けて差し上げますね、綺麗なお方。あなたは男にしておくには勿体のうございます……」

「いやいやいや待つて待つて待つて」

視界の罅が動く。ぎらりと鋭い光が電灯の明かりを跳ね返した。一刻の猶予もない。香俱耶は人生のなかで最も必死に、人体組織への没入を試みる。

「左腕神経に侵入っ」

罅が閃いた。操作した左腕を伸ばし、風呂敷の上に広げられた記録媒体をつかむ。自分の身体の様子がおかしい事に気づいた薫子が、動きを止めた。

「王手！」

つかんだ機械を胸元へ、すばやく差し入れ、その中の対抗言霊式を解放し、香俱耶は離脱する――。

「アハハハハ。そいつぁ傑作だ！」

後日の遊馬茶屋。薫子との顛末を聞いて大笑いする源内は上機嫌だった。反して香俱耶は憮然としている。

「源内様、成分の分析はしていたんでしょう。なんで毒性を教えてくださいなかつたんですか」

「死にはしないとわかってたからな。それにお前なら、そっちのほうが^{スマート}粹に解決できると思ったのさ。でもタマとサオをなくして帰ってこなくてよかった。それじゃあたしが詰まらない――」

「人事だから笑えるんです。まったく……。で、源内様。あの妖物はいったいなんだつたんですか？ 新種なら報告しないといけない」
「新種ってほどじゃないよ。ただ珍しい合体の仕方をしてただけだ。あいつは『終わりの始まり』。言霊である妖物つてのは死じゃなく終の概念で捕らえるべきものだ。要するに末端へ取り付いて終止符の役割をする、妖物の寄生体なんだよ。妖物にとっては自然死の代

わりの重要な要素だ」

「それがなんであんなことに」

「あの毒、ひいてはそれを抽出した植物に反応して、寄生したんだろうね。お前が見た花って言うのは、おそらく何種類かの植物が混じり合って、妖物化したものだ。あそこまで言霊式が組みあがるのには、長い年月がかかったらうよ」

「そうでしょうね……」

薫子が殺されかけたのはまだ年端もいかぬころ。十年、二十年とかけて妖物は成長したのだ。その間自らの殻へ閉じこもり続けていたことを思うと、ひどい目に合わされたとはいえ薫子には不憫な想いを禁じえない。

「ま、一件落着ってことさ——」

源内がそう締めくくったそのとき。

「お——お客様、困ります」

にわかに階下が騒がしくなる。小間使いの少年が叫び、それを振り切るようにして階段を踏む足音が登ってくる。香俱耶はその場から階下へ声をかける。

「どうした？」

「ど、どうにも、はや……。あの、こんなにもらつていいんですか？」

小間使いは買収されたいらしい。香俱耶と源内は顔を見合わせ、部屋の障子が開くのを見守った。

「お久しぶりでございます」

強引にここまで上がりこんだとは想像できないほど優雅に、薫子が部屋の前で微笑んだ。香俱耶はあんぐりと口を開ける。

「い、いったい……？」

「源内様もごいっしょと聞き及び、がまんならず飛んできてしまいましたの」

「どういうことだ、姐さん？」

とたんに表情をきつくした源内が、やくざ顔負けでガンをつける。

それをものともせず、薫子は微笑を絶やさない。

「おふたりのお力で、わたくしは長年の悪夢からようやく目覚めることが出来ました。そのお礼を、まず……」

畳へ正座した薫子が、三つ指について頭を下げる。慌てて香俱耶も低頭した。

「いえいえ、これも仕事」

「特に香俱耶様の勇氣にはわたくし、感動いたしました。そこで今日は、香俱耶様がこのような娼館をお出になる算段をしに参りましたの——」

「ああ？ な、なんだお前、香俱耶を囲おうって言っのか！？」

狼狽した源内が、普段から良いとは言えない言葉遣いを荒くする。

「はい。資金も表に用意して……」

「駄目だ！ こいつはあたしのだ！」

「はて、そのようなお話は伺っておりませんが」

「お前、確信犯だな。いいだろう、金ならこつちもある——」

「いいでしょう、受けて立ちます」

途方もない金額がふたりの口から飛び出始める。

突然始まった競売に、香俱耶は天を仰いでため息をついた。

「僕の身体は、僕のなんですけどね……」

とりあえず一段落するまで、現実世界から逃避しよう。

エレキテル
電腦の中へ没入するため、香俱耶はパソコンの前へ向かった。

——おわり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4011w/>

高級男娼 香具耶の上客

2011年9月4日03時33分発行